



Medi-Way 医療通訳者紹介 Vol.34

英語担当 堀場さん

◆なぜ医療通訳者になった？

幼少期をアメリカで過ごした経験から、多文化共生に関心を持っていました。もともとは英語の教材制作に携わっていましたが、医療従事者である家族から外国人患者対応の現状を聞き、自身の背景を活かして貢献したいと考えるようになりました。大阪大学の医療通訳養成コースで学ぶ中、研修先である東和通訳センターで通訳の必要性を目の当たりにし、医療通訳に仕事として取り組むことを決断しました。

◆今まで医療通訳に携わってきて一番嬉しかったことは？

医療通訳の実務を始めてまだ1年ほどですが、初めて担当した通訳は今でも鮮明に覚えています。依頼が入った際は緊張で心臓が高鳴っていましたが、通訳が始まると落ち着き、患者さんと医療者のコミュニケーションをつなぐことに集中していました。通訳後に感謝の言葉をいただき、心が温かくなりました。今後も初心を忘れず、安心して任せいただける通訳者でいられるよう、経験を積んでいきたいです。

◆より良い通訳をするために心掛けていることは？

電話での通訳を担当する機会が多く、視覚情報がない分、必要に応じて状況確認を丁寧に行うことを心がけています。また、患者さんの出身地や年齢などに合わせてより伝わりやすい表現ができるよう、日頃から教材や他の通訳者から学び、自分の引き出しを増やすようにしています。仕事前にはシャドーイングを行い、通訳のスイッチをオンにしてから業務に臨んでいます。いつどのような通訳を担当するかわからないことも多いため、”always ready (いつでも対応できる)”を目指しています。

医療通訳のドレスコードって？

先日、通訳センターで服装について話す機会がありました。医療通訳士には医療従事者のようにユニフォームがあるわけではないため、医療通訳士講座で職業倫理について勉強している時、「スーツである必要はないが、派手かつ露出度の高い服装は避け、清潔感のある服装を心がけることが大切」と習いました。

病院で同行通訳の経験のある通訳士は、検査室に入る時にうっかり落ちてしまわないように、小さなものでも体や髪につけるアクセサリーはもちろん、ビーズなどの装飾品がついたカバンは避けるなど、医療行為に影響がないように細心の注意を払っていたそうです。

Medi-Way通訳センターでの通訳対応は基本的にオンラインのビデオ通訳ではありますが、画面に映る上半身の服だけではなく、通訳センターがガラス張りになっていて外部からのお客様がセンター内を外からご覧になることもあるため、原色を使った服装は控えるなど、私たちは医療通訳士にふさわしい服装で勤務しています。通訳対応の記録を取ったり、他の通訳士の席に駆け寄ってサポートすることもあるので、カジュアルになりすぎないように心がけながらも、スニーカーを履いている通訳士もいます。

医療現場では医療者はそれぞれのユニフォーム、通訳士は基本的にシンプルな服装で、というのが日本ではデフォルトのようですが、アメリカでは、終末期医療を扱う現場で少しでも患者さんが明るい気持ちになれるように、医療者があえて派手な服装をすることがあるそうです。医療現場にいる一人ひとりが気持ちよくその場を共有できる服装が理想なのかもしれませんね。



今月のトピックス

タトゥーと医療安全

～医療通訳士として気を付けたいこと～

医療現場の会話の中で、「タトゥー」について触れられることがあります。表面では分りにくいところですが、周囲を見渡してみると、実は「隠れタトゥー」とも言える文化が私たちの身近にあるように感じます。ロック歌手のように大きく派手なタトゥーを入れる人もいれば、お守りとして小さなタトゥーを入れる人、ファッションとして楽しむ人など、その意味や目的はさまざまです。

自分の皮膚に痕跡を残す行為は、医療とはあまり関係のないことのように思われがちですが、医療通訳の現場では注意が必要なポイントの一つです。例えば検査前の問診では、「体内に金属は入っていませんか？」「タトゥーは入っていますか？」といった確認が丁寧に行われます。通訳としては、その情報を正確に聞き取り、医療者にきちんと伝えることが重要です。

患者さんの安全を守るためにも、こうした情報は丁寧に確認し、確実に医療者へ伝える必要があります。

医療通訳として、患者さんの文化や宗教、価値観を尊重しながらも、安全な医療につながる情報を正確に橋渡しすることの大切さを改めて感じています。

